

中国人日本語学習者の 語彙的複合動詞の習得に影響する要因

玉岡賀津雄・初 相娟

要旨 中国人日本語学習者を対象に、語彙的複合動詞 V_1+V_2 の習得に影響すると予想される要因を4つ設定した。具体的には、(1) V_1 動詞の難易度、(2) V_2 の他動性、(3) 複合動詞の抽象性、(4) 1年間か2年間かという日本語学習期間である。分析の結果(図1の分類木分析のデンドログラム)、主要な要因は V_1 動詞の難易度であった。 V_1 動詞が「易しい」場合は、79.3%の正答率で、 V_1 動詞が「難しい」場合は、62.1%の正答率であった。 V_1 動詞の違いから分岐して、「易しい」場合には、日本語学習期間が影響した。2年間の日本語学習期間では82.3%の正答率であり、1年間の場合には74.5%の正答率であった。さらに、 V_2 動詞の他動性の影響がみられ、最も習得が容易だったのは、複合動詞の抽象性に関係なく、 V_1 動詞が易しく、 V_2 動詞が他動詞で、2年間日本語を学習した条件であり、85.3%であった。最も習得が難しかった条件は、日本語学習期間と V_2 動詞が他動性に関係なく、 V_1 動詞が難しく、さらに V_1+V_2 が意味的に抽象的な語彙的複合動詞で、正答率が57.3%に過ぎなかった。

1. 目的

日本語では、2つの動詞(V_1+V_2)を結合して複合動詞をつくることができる。こうした複合動詞は、日本語の語彙には多くみられるものの、世界の多数の言語では珍しい。複合動詞は、一般に、補文をつくるかどうかで、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2種類に分けられる(姫野1999, 影山1993, 1999, 影山・由本1997, 由本2011)。たとえば、「飲み比べる」という語彙的複合動詞は、先にくる動詞(V_1)である「飲む」が、次にくる動詞(V_2)の「比べる」と結合してひとつの動詞 [$_{VP}$ NP-o V_1 (飲み) + V_2 (比べる)] をつくる。これに対して、「飲み終える」という統語的複合動詞は、「コーヒーを」という名詞句が直接に V_1 動詞「飲む」と結合して動詞句(VP_1)を作る。

V_1 動詞は、あくまで補文の動詞である。さらに、この動詞句が後にくる「終える」の動詞(V_2)に結びつき、動詞句(VP_2)をつくり、 $[_{VP_1} NP-o V_1(飲み) [_{VP_2} V_2(終える)]]$ という構造となる。統語的複合動詞では、 V_2 がいろいろな動詞句(VP_1)を取りうるので、一般に、語彙的複合動詞と比べて、多様な V_1 と結合しうる(Tamaoka, Lim and Sakai 2004, 玉岡 2010)。

統語的複合動詞に対し、語彙的複合動詞は、2つの動詞が「特有の(idiosyncratic)」結合をしており、意味的な制約が強い。そのため、2つの動詞の組み合わせから意味を類推するだけでは正しく理解できない場合が多い(由本 2005)。たとえば、「飲み歩く」であれば、あちこちのバーやスナックを歩き回り、アルコール全般としての「酒を」飲むことを意味する。「なじみの店を飲み歩く」という表現だけで、何を飲むかを示さなくても、酒を飲むことを意味する。そのため、「ミルクを飲み歩く」というと、奇妙な感じを与える。同様に、「住み込む」という語彙的複合動詞の場合も、住み込むことになるのは、弟子や使用人であり、主人や家主であってはならない。こうした意味的な制約の強い語彙的複合動詞は、外国人日本語学習者にとって習得が難しいと考えられる。

そこで本研究では、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、語彙的複合動詞の習得に影響する要因を検討することにした。語彙項目に関係した要因として、語彙的複合動詞の V_1+V_2 を後続の動詞 V_2 が自動詞か他動詞か、 V_1 の難易度、複合動詞全体の意味が具体的か抽象的か、の3つを設定した。さらに、これに日本語学習期間が1年か2年か、という学習者の特性を加えて、4つの要因を設定した。そして、これら4つの要因が語彙的複合動詞の習得に与える影響を検討した。

2. 調査

2.1 語彙的複合動詞と要因設定および語彙選択

語彙的複合動詞の特性から考えて、日本語習得に影響を与えると思われる要因を3つ仮定した。第1に、 V_2 の他動性(transitivity)である。調査語を自動詞の「上がる」、「かかる」、「入る」とし、それに対応する他動詞の「上げる」、「かける」、「入れる」を選び、自動詞と他動詞の交替があるペアを3組設定した。第2に、 V_1 の難易度を要因として設定した。日本語能力試験で1級か2級に掲載されている「駆ける」(1級)、「襲う」(1級)、「攻める」(2級)などを難しい動詞とした。また、「立つ」(4級)、「降る」(4級)、「投げる」(3級)などの3級か4級の語彙を簡単な動詞とした。第3に語彙的複合動詞の全体の意味が具体的か抽象的かを要因として設定した。たとえば、「立ち上がる」、「襲いかかる」、「投げ入れる」は、容易に状況が想像できるので、具体的な意味を示す語彙とした。一方、「震え上がる」、「死にかかると」、「聞き入る」は、状況が想像できるものの、それほど鮮明ではないので、抽象的な意味を示す語彙とした。以上の3つの要因を基にして、 $2(V_2$ が自動詞・他動詞) $\times 2(V_1$ の難易度) $\times 2$ (語彙的複合語の意味；具体的、抽象的) $\times 3$ (3自他交替のセット) $= 24$ の語彙的複合動詞を選択した。これらの語彙的複合動詞の属性と各学習期間の正答者数、誤答者数、正答率は、表1に示したとおりである。

表1 語彙的複合動詞の日本語学習期間1年間と2年間の正答・誤答者数および正答率

	V ₂ の 種類	V ₂	V ₁ 難 易度	複合動詞	学習期間1年間(N=65)			学習期間2年間(N=103)		
					正答者	誤答者	正答率	正答者	誤答者	正答率
具体的	自動詞	上がる	易	立ち上がる	56	9	86.2%	92	11	89.3%
			難	駆け上がる	44	21	67.7%	71	32	68.9%
		かかる	易	降りかかる	43	22	66.2%	75	28	72.8%
			難	襲いかかる	26	39	40.0%	63	40	61.2%
		入る	易	押し入る	48	17	73.8%	81	22	78.6%
			難	攻め入る	45	20	69.2%	78	25	75.7%
	他動詞	上げる	易	持ち上げる	56	9	86.2%	92	11	89.3%
			難	担ぎ上げる	39	26	60.0%	75	28	72.8%
		かける	易	吹きかける	50	15	76.9%	75	28	72.8%
			難	着せかける	40	25	61.5%	79	24	76.7%
		入れる	易	投げ入れる	60	5	92.3%	94	9	91.3%
			難	抱き入れる	48	17	73.8%	66	37	64.1%
抽象的	自動詞	上がる	易	晴れ上がる	59	6	90.8%	99	4	96.1%
			難	震え上がる	45	20	69.2%	64	39	62.1%
		かかる	易	死にかかる	32	33	49.2%	73	30	70.9%
			難	崩れかかる	39	26	60.0%	60	43	58.3%
		入る	易	聞き入る	38	27	58.5%	70	33	68.0%
			難	感じ入る	36	29	55.4%	51	52	49.5%
	他動詞	上げる	易	書き上げる	46	19	70.8%	94	9	91.3%
			難	縫い上げる	42	23	64.6%	72	31	69.9%
		かける	易	飲みかける	42	23	64.6%	76	27	73.8%
			難	倒れかける	25	40	38.5%	59	44	57.3%
		入れる	易	受け入れる	51	14	78.5%	96	7	93.2%
			難	雇い入れる	37	28	56.9%	48	55	46.6%

さらに、誤りの条件として、「答え入れた」など16種類のありそうな2つの動詞の組み合わせの擬似複合動詞を作成した。これらを単文で提示して、「大きな荷物を持ち上げた。」ならば正解であるが、「難しい数学の問題を答え入れた。」ならば不正解として採点した。合計40文になるが、質問紙では、正答と誤りの文をランダムに配列した。調査に使用した文はすべて補記に示した。

2.2 被験者 —日本語学習者

2009年9月に、中国の大学で日本語を学習している1年終了生65名、2年終了生103名の計168名(男性17名、女性151名)に対して紙媒体でのテストを行った。最年少の日本語学習者は18歳0カ月で、最年長は23歳3カ月であり、平均年齢は20歳5カ月(標準偏差は10カ月)であった(3名は未記入なので165名の平均)。ここで、語彙的特徴として設定した3つの要因に加えて、日本語学習の観点から、日本語学習期間(1年間または2年間)を、複合動詞習得の4つ目の要因として設定した。

3. 分析と考察

3.1 分析の手順

語彙的複合動詞の習得に影響する要因を、以下の3つの手順で分析した。第1に、語彙的複合動詞の習得に影響する他動性、難易度、抽象性、学習期間の4つの要因を四元配置の分散分析(4-way analysis of variance)で検討した。第2に、語彙的複合動詞の正誤判断を決める4つの要因の影響の強さを階層的に検討するために分類木分析(classification tree analysis)で検討した。第3に、語彙的複合動詞の個々の項目について、習得の類似性を階層クラスタ分析(hierarchical cluster analysis)、さらにその分類の正しさを正準判別分析(canonical discriminant analysis)で検討した。

3.2 分散分析

語彙的複合動詞を含む24文について、文の複合動詞の使い方の正誤判断が正しい場合を1、正しくない場合を0として、被験者ごとに得点化した。理解度(あるいは習得度)を24点満点のパラメトリックデータとして、 $2(V_2$ が自動詞・他動詞) $\times 2(V_1$ の難易度) $\times 2$ (語彙的複合動詞の意味が具体的か抽象的か) $\times 2$ (日本語学習期間が1年間または2年間)の分散分析を行った(初めの3つの変数が反復測定)。その結果、 V_2 の他動性 [$F(1,166) =$

7.475、 $p < .01$]、 V_1 の難易度 [$F(1,166) = 145.766$ 、 $p < .001$]、 $V_1 + V_2$ の抽象性 [$F(1,166) = 24.979$ 、 $p < .001$]、さらに学習期間 [$F(1,166) = 9.237$ 、 $p < .01$]のすべての主効果が有意であった。自動詞のほうが他動詞よりも得点が高く、 V_1 の日本語能力試験の配当レベル(4級から1級に難易度が上がる)が低いほうが高い動詞よりも得点が高く、抽象的な意味の語彙的複合動詞よりも具体的なほうが得点が高く、2年終了生(2年間の学習期間)の方が1年終了生(1年間の学習期間)よりも得点が高い。さらに、これら4種類の変数について有意な交互作用がみられたのは、他動性と抽象性 [$F(1,166) = 4.079$ 、 $p < .05$]、他動性と難易度 [$F(1,166) = 5.864$ 、 $p < .05$]および抽象性、難易度と学年 [$F(1,166) = 13.329$ 、 $p < .001$]であった。これらの交互作用から、 V_2 が自動詞で抽象的な複合動詞は得点が低く、 V_2 が他動詞で抽象的な意味の場合は得点が低く、さらに、 V_1 の配当級が高く V_2 が他動詞で意味が抽象的な条件である「縫い上げる」「倒れかける」「雇い入れる」が最も得点が低かった。

以上のように、語彙的複合動詞の背景要因として設定した4つの背景要因である V_2 他動性、 V_1 難易度、 $V_1 + V_2$ の意味の抽象性および日本語学習期間のすべてが習得に影響していた。さらに、複数の要因間に複数の交互作用があり、4つの変数が複雑に絡み合って相互に関連して語彙的複合動詞の習得に影響していることがわかった。しかし、分散分析では、これらの変数がどの程度の強さで語彙的複合動詞の習得に影響するかを判定することができない。そこで、背景要因の影響力を階層的に分析するために、決定木分析(decision tree analysis)の一種で、これら4つの要因群で正答と誤答の頻度を予測する分類木分析の多変量解析の手法で検討した。

3.3 分類木分析

各日本語学習者による複合動詞の正誤判断のデータの頻度を使って、分類木分析を行った(分類木分析の説明と例は、玉岡 2006, Tamaoka and Ikeda 2010 を参照)。分類木分析は、複数の説明変数(あるいは、独立変数)で、質

的データの目的変数(あるいは、従属変数)を予測する多変量解析である。複数の変数に基づき、階層別の組み合わせによってモデルを構成する。その結果を木の枝葉のように描いてくれるので、樹形モデルともいわれる。分類木分析には、分析を繰り返すことにより犯しやすい第1種の誤りを考慮したボンフェローニの補正が組み込まれている。本研究では、語彙的複合動詞 V_1+V_2 について、分散分析と同様に、(1) V_2 が自動詞か他動詞、(2) V_1 の難易度が高い(1・2級)か低い(3・4級)か、(3)複合動詞の意味が具体的か抽象的か、(4)日本語学習期間が1年間か2年間かの4つの変数で、語彙的複合動詞が使われている文の正誤判断の頻度(正答者数と誤答者数)を予測する分類木分析を行った。分類木分析の結果は、図1のデンドログラム(樹形図)に描いたとおりである。なお、本分析の相対リスクは29.3%であった。

デンドログラムをみると、語彙的複合動詞が正しいかどうかの判断に最も強く影響した要因は、 V_1 の難易度であることがわかった [$\chi^2(1) = 143.29$, $p < .001$]。図1のノード1の「易しい」とノード2の「難しい」を比べると、3級または4級相当の動詞である場合には、79.3%の正答率であるのに対し、1級または2級相当の動詞である場合には、62.1%の正答率であった。 V_2 は同じ動詞になるよう統制されている(表1を参照)ので、 V_1 の難易度が語彙的複合動詞の習得に最も強く影響していることがわかる。たとえ2つの動詞の結合である複合動詞であっても、それを構成する V_1 動詞を早い時期に学習している(3・4級レベル)ほうが、遅い時期に学習する(1・2級レベル)よりも容易であったと考えられる。

さらに、図1のデンドログラムに描かれたように、 V_1 動詞が「易しい」場合と「難しい」場合に分かれた。 V_1 動詞が「易しい」場合には、学習期間が2番目に強く影響した [$\chi^2(1) = 17.68$, $p < .001$]。図1のノード3の「2年間」とノード4の「1年間」を比べると、2年間の日本語学習期間を経ている場合には、82.3%の正答率であるのに対し、1年間の場合には、74.5%の正答率であった。

学習期間が2年間の学習者については、 V_2 動詞の他動性が強く影響した。

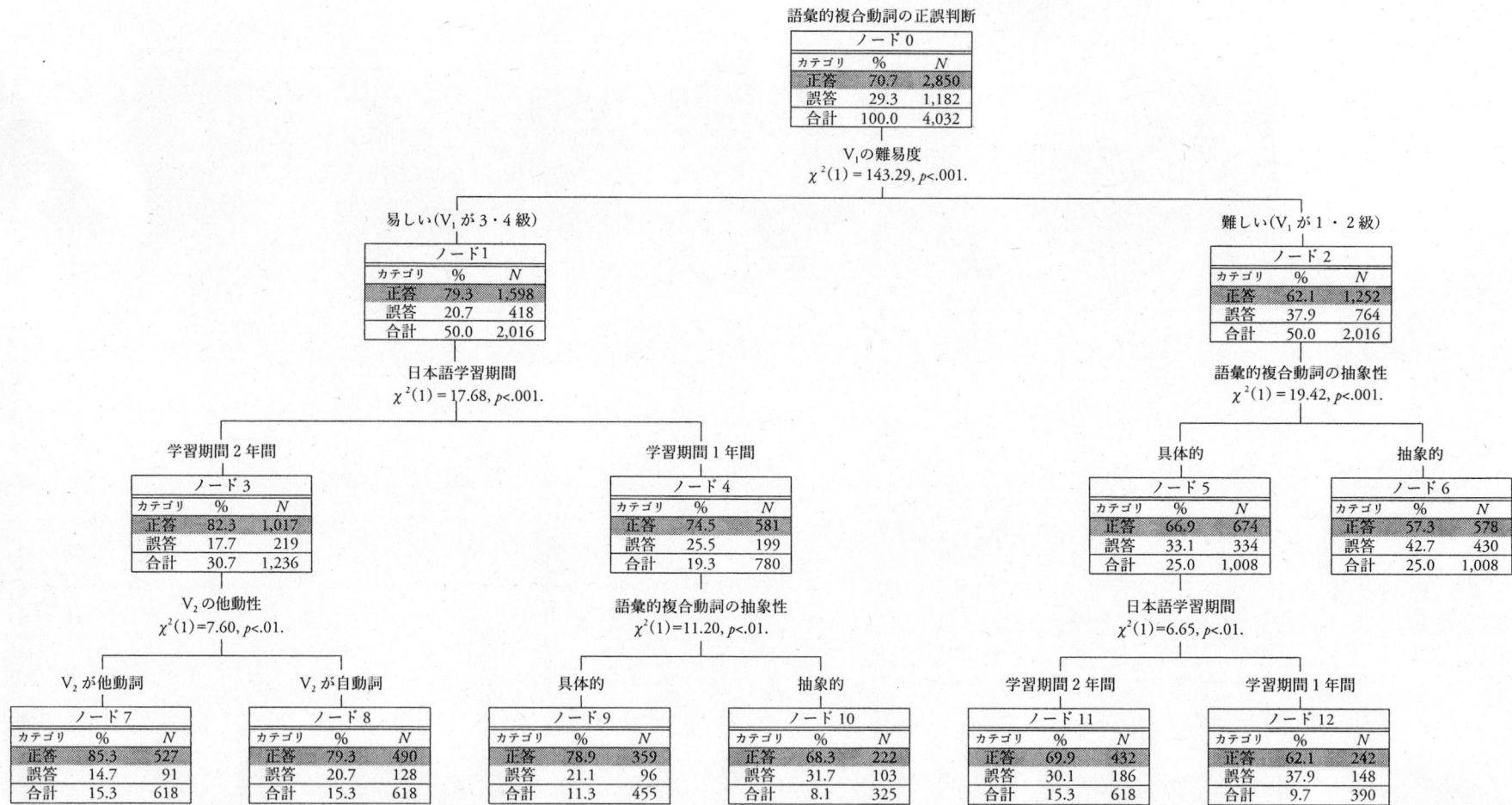


図1 中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する4つの要因についての分類木分析の結果

図1のノード7の他動詞の場合、85.3%の正答率となり、ノード8の自動詞の場合は、79.3%である。いずれも高い正答率ではあるが、他動詞の方が、有意に高かった。一方、1年間の日本語学習経験をもつ学生は、複合動詞の具象性が次に強く影響していた [$\chi^2(1) = 11.20, p < .01$]。図1ではノード9とノード10に示されたように、具体的な意味の語彙的複合動詞の方(78.9%)が、抽象的な意味のもの(68.3%)よりも有意に正答率が高くなった。

一方、ノード2のV₁動詞が難しい場合については、次に強い要因は、複合動詞の具象性であった [$\chi^2(1) = 19.42, p < .001$]。ノード5の具体的な語彙的複合動詞の正答率は66.9%で、ノード6の抽象的な場合は57.3%であった。V₁動詞が難しく、具体的な意味の語彙的複合動詞については、さらに日本語学習期間の影響がみられた [$\chi^2(1) = 6.65, p < .01$]。ノード11の日本語学習期間が2年間の場合には69.9%の正答率だが、ノード12の日本語学習期間が1年間の場合には62.1%の正答率であった。

最終的に、最も正答率が高い語彙的複合動詞は、デンドログラムの最終ノードとなるノード7であり、複合動詞全体の意味の抽象性には関係なく、V₁動詞が3・4級レベルの易しい動詞で、V₂動詞が他動詞の語彙的複合動詞を、2年間日本語を学習した学生が判断した場合であった。一方、最も習得の難しい語彙的複合動詞は、ノード6であり、日本語学習期間およびV₂動詞の他動性に関係なく、V₁動詞が難しく、語彙的複合動詞の意味が抽象的な場合であった。

3.4 階層的クラスタ分析と正準判別分析

分散分析と分類木分析では、語彙的複合動詞の特徴と日本語学習期間という4つの要因を基に習得の度合いを検討した。しかし、語彙的複合動詞24語にはそれぞれに固有の特徴がある。そこで、日本語学習期間の1年間と2年間の正答率を基に階層的クラスタ分析による分類を試みた。クラスタ併合の方法はウォード法、複合動詞間の距離は平方ユークリッド距離を使用し

た。まず最高値の25ポイントで、「立ち上がる」、「持ち上げる」、「投げ入れる」など6語が他の語と区別された。これらを、クラスターⅠとする。次に10ポイントで「駆け上がる」、「縫い上げる」、「攻め入る」など12語が分類された。これを、クラスターⅡとする。また、同じ10ポイントで、「感じ入る」、「雇い入れる」、「襲いかかる」など6語が1つの分類となった。これを、クラスターⅢとする。

階層的クラスター分析は、類似した複合動詞群を見出すために利用できる探索的な手法である。しかし、得られたクラスターが適切に分類されたものかどうかの保証はない。そこで、学習歴1年間の1年課程終了生と学習歴2年間の2年課程終了生の正答率の2つの変数に基づいて、階層的クラスター分析で得られた3つのクラスターが正しく分類されているかどうかを検討するために、正準判別分析を行った。第1正準判別関数は、固有値が10.224、寄与率が99.7%、正準相関が0.954 ($p < .001$) で有意であったが、第2正準判別関数は、固有値が0.030、寄与率が0.3%、正準相関が0.172 ($p = 0.434$, *ns.*) で有意ではなかった。3つのクラスター化について、第1正準判別関数のみで十分に識別されているといえる。また、3つのグループの判別の良さについて交差妥当化で検証したところ、正判別率は95.8%であった。正準判別分析によって、階層的クラスター分析が作り出した語彙的複合動詞の3つのクラスターは、正確な分類であることが支持された。

本研究のクラスター分析は、学習期間を基に語彙的複合動詞の習得を検討するためのものである。そこで、日本語学習期間1年間の正答率をX軸、日本語学習期間2年間の正答率をY軸として、語彙的複合動詞24語を図2のようにプロットし、その上にクラスター分析の結果を重ねて描いた。まず全体として、日本語学習歴が1年間では、複合動詞24問の平均正答率は67.1% (標準偏差は14.1%) であった。日本語学習歴が2年間では、平均正答率が72.9% (標準偏差は13.7%) で、全体的な伸びは5.8%であった。

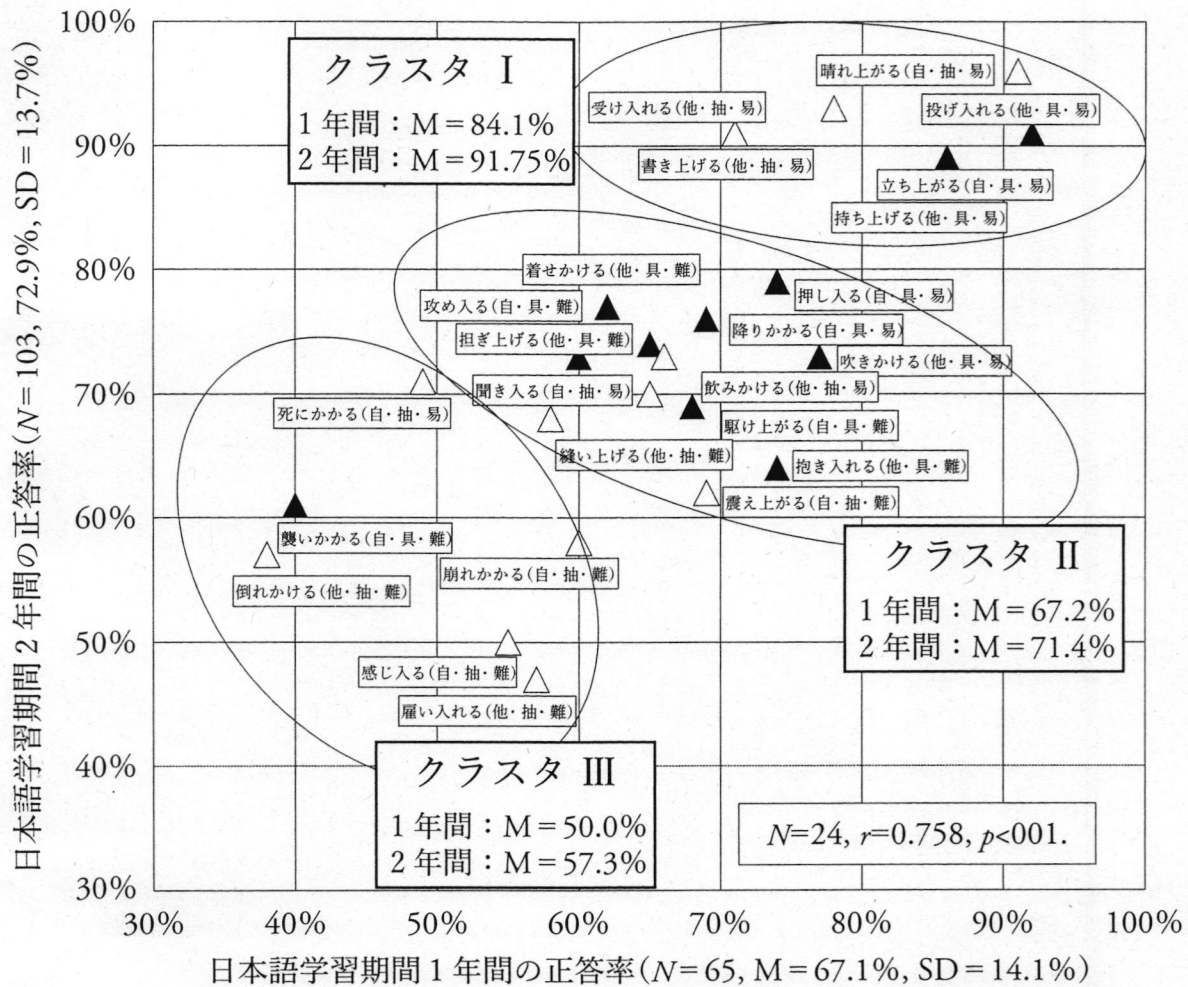


図2 日本語学習期間1年間と2年間の正答率の散布図とクラスタ分析の結果

注1: 図のクラスタIからIIIは、クラスタ分析による分類結果を示す。

注2: 白い表示(△)は抽象的意味、黒い表示(▲)は具体的意味を示す。

3つのクラスタをみると、分類木分析が示したように、V₁動詞の難易度が強く影響していることがわかる。クラスタIは、語彙的複合動詞の6語において、すべてV₁が3・4級レベルの易しい動詞である。結果として、クラスタI全体の平均も学習期間1年間で84.10%であり、2年間で91.75%と高い。一方、クラスタIIIは、6語の内5語がV₁が1・2級レベルの難しい動詞である。「死にかかると」のV₁動詞の「死ぬ」は易しい動詞で、例外であるが、語彙的複合動詞全体の意味が抽象的であるため、日本語学習が1年間では正答率が低く、2年間になってはじめて伸びたのであろう。クラスタIII全体の平均も低く、日本語学習が1年間で50.0%であり、2年間で

若干伸びて 57.3%であった。 V_2 が他動性は、クラスタ I と III において自動詞と他動詞で混在しているので、直接に正答率に影響していないことがうかがえる。クラスタ II は、クラスタ I と III の中間的な位置となり、さまざまな特性をもった語彙的複合動詞が混在している。

4. 総合考察

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者と対象に、とくに語彙的複合動詞(複合動詞の分類については、姫野 1999, 影山 1993, 1999, 影山・由本 1997, Tamaoka, Lim and Sakai 2004, 玉岡 2010, 由本 2011 を参照)に焦点をあてて、その習得に影響する要因を検討した。研究対象とした要因は、 V_1 動詞の難易度、 V_2 の他動性、 V_1+V_2 複合動詞の抽象性、日本語学習期間の 4 つである。分散分析では、4 つすべての要因の主効果が有意であり、すべての変数が影響していることがわかった。しかし、交互作用も複数見られ、これらの要因が絡み合って相互に影響していることもわかった。そこで、複数の要因の影響の強さとそれらの交互作用を階層的に示してくれる分類木分析で検討した。その結果、最も強い要因になったのは、図 1 で示したように、 V_1 動詞の難易度であった。 V_1 動詞が「易しい」(3・4 級相当) 場合は 79.3% の正答率で、 V_1 動詞が「難しい」(1・2 級相当) 場合は、62.1% の正答率であった。この傾向は、クラスタ分析で、クラスタ I と III の語彙的複合語群を分ける特性が、 V_1 動詞の難易度であったことから裏づけられる。 V_2 動詞は条件間で同じ動詞になるように統制しているので、 V_1 動詞に関する語彙的知識の影響が、複合動詞の習得に強く影響したことが強く支持される。

次に、 V_1 動詞の違いから分岐して、「易しい」 場合には、日本語学習期間が強く影響した。2 年間の日本語学習期間では 82.3% の正答率であり、1 年間の場合には 74.5% の正答率であった。難易度の低い V_1 動詞は、早い時期に学習されるので、それが 1 年間よりも 2 年間の学習を経ることで、習得

が定着し易いからであろう。学習期間が2年間の学習者はさらに分岐して、 V_2 動詞の他動性が強く影響した。他動詞の場合、85.3%の正答率で、自動詞の場合は79.3%であった。

語彙的複合動詞の多くは、他動詞+他動詞という「他動性調和の原則」をとる(影山1993)。陳(2012)によると、『分類語彙表増補改訂版』(国立国語研究所, 2004)から抽出した2,499語の語彙的複合動詞のうち、この原則に反するのはわずかに155語であるとしている。つまり、93.8%が他動性調和の原則に従っており、残る6.2%は例外といえる。この原則の説明力はきわめて大きい。そうすると、本研究のように、 V_1+V_2 が「自動詞+自動詞」あるいは「他動詞+他動詞」の場合には、「他動詞+他動詞」が日本語の語彙における大多数の組み合わせであり、日本語学習者が頻繁に接していると予想されるので、習得されやすかったのであろう。ただしこの点については、今後、他動性調和の原則に従わない「打ち上がる」や「持ち上がる」のような「他動詞+自動詞」の語彙的複合動詞(西尾1982, 須賀1984)の習得についても検討してみなくてはならない。さらに、この種の語彙的複合動詞は、「打つ」と「上がる」の主語あるいは「持つ」と「上がる」の主語が異なっており、「主語一致の原則」にも反している(松本1998, 由本2005)ので、習得がより難しいことが予想される。これらの複合動詞については、さらなる研究が必要である。

一方、 V_1 動詞が「易しい」場合、さらに1年間の日本語学習期間であれば、次に複合動詞の抽象性が強く影響していた。しかし、図1のデンドログラムに描かれたように、抽象性の影響は、むしろ V_1 動詞が「難しい」条件で、習得が難しい方向で強く影響していた。この条件での語彙的複合動詞の正答率は57.3%に過ぎない。本研究では、「他動性調和の原則」や「主語一致の原則」に反するような例外的な複合動詞は検討していないが、それらを除いた一般的な結果として、日本語学習期間に関係なく、 V_1 動詞が難しく、 V_1+V_2 の意味が抽象的な語彙的複合動詞が、最も習得が難しいことが示された。

最後に、本研究で使った語彙的複合動詞 24 語の中に、中国語と類似した複合動詞が 2 つあった。「投げ入れる」は中国語では「投入」であり、「攻め入る」は中国語では「攻入」である。仮に、日本語学習者の母語である中国語からの影響が顕著であるなら、これらの複合動詞は正答率が高くなると予想される。実際、「投げ入れる」は、クラスタ I に分類されており、学習期間 1 年で 92.3%、2 年で 91.3% であり、両学習期間で共に 90% 以上の正答率であった。しかし、「攻め入る」は、クラスタ II の分類であり、学習期間 1 年で 69.2%、2 年で 75.7% であり、他の複合動詞と比べて正答率はさほど高くない。「投げ入れる」は、 V_1 動詞の「投げる」が 3 級レベルで易しく、「攻め入る」は、 V_1 動詞の「攻める」が 2 級レベルで難しい。そのため、語彙的複合動詞の正答率を決めるのは、分類木分析が示したように V_1 動詞の難易度のようである。わずかに 2 つの例ではあるが、中国語と日本語の語彙の類似性という母語の影響は強くはなさそうである。この点について、今後の研究で、さらに検討すべきであろう。

参考文献

- 姫野昌子(1999)『複合動詞の意味用法と構造』ひつじ書房。
 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。
 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版。
 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社。
 国立国語研究所(2004)『分類語彙表増補改訂版』大日本図書。
 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-77。
 西尾寅弥(1982)「自動詞と他動詞一対応するものとししないもの一」『日本語教育』47, 57-68。
 須賀一好(1984)「現代語における複合動詞の自・他の形式について」『静岡女子大学研究紀要』47, 57-68。
 玉岡賀津雄(2006)「「決定木」分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する接続

助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2), 169-179.

玉岡賀津雄(2010)「コーパス分析の研究例2:複合動詞の計量的解析」中本敬子・李在鎬(編)『認知言語学研究の方法』(pp.181-195)ひつじ書房.

Tamaoka, Katsuo and Fumiko Ikeda (2010) Whiskey, or Bhiskey? Influence of first-element and dialect region on sequential voicing of *shoochuu*. 『言語研究 (Gengo Kenkyu)』137, 65-80.

Tamaoka, Katsuo, Hyunjung Lim, and Hiromu Sakai (2004) Entropy and redundancy of Japanese lexical and syntactic compound verbs. *Journal of Quantitative Linguistics*, 11 (3), 233-250.

陳劭懌(2012)「『他動詞調和の原則』再考—なぜ語彙的複合動詞に『他動詞調和』が存在しているのか—」「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会の配布資料. 2012年2月18日、国立国語研究所.

由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房.

由本陽子(2011)『レキシコンに潜む文法とダイナミクス』開拓社.

補記：本研究のテストで使用した語彙的複合動詞一覧

1. 正しいと判断すべき項目

1.1 具体的な意味をもつ複合動詞

V ₂ の種類	V ₂	V ₁ 難易度	複合動詞	V ₁ の級	設問	1年間	2年間
自動詞	上がる	易	立ち上がる	4	彼はゆっくり立ち上がった。	86.15%	89.32%
		難	駆け上がる	1	小学生の男の子が階段を駆け上がった。	67.69%	68.93%
	かかる	易	降りかかる	4	傘が小さかったので、肩に雨が降りかかった。	66.15%	72.82%
		難	襲いかかる	1	強盗が背中から襲いかかってきた。	40.00%	61.17%
	入る	易	押し入る	4	泥棒が家に押し入った。	73.85%	78.64%
		難	攻め入る	2	敵が城に攻め入ってきた。	69.23%	75.73%
他動詞	上げる	易	持ち上げる	4	大きな荷物を持ち上げた。	86.15%	89.32%
		難	担ぎ上げる	2	箱を肩に担ぎ上げた。	60.00%	72.82%
	かける	易	吹きかける	4	手に息を吹きかけた。	76.92%	72.82%
		難	着せかける	2	寒がっている子どもに上着を着せかけた。	61.54%	76.70%
	入れる	易	投げ入れる	3	ボールを箱に投げ入れた。	92.31%	91.26%
		難	抱き入れる	2	けがをした犬を家の中に抱き入れた。	73.85%	64.08%

1.2 抽象的な意味をもつ複合動詞

V ₂ の種類	V ₂	V ₁ 難易度	複合動詞	V ₁ の級	設問	1年間	2年間
自動詞	上がる	易	晴れ上がる	4	雨がやんで、空がきれいに晴れ上がった。	90.77%	96.12%
		難	震え上がる	2	怖い映画を見て震え上がった。	69.23%	62.14%
	かかる	易	死にかかる	4	死にかかっている鳥を助けた。	49.23%	70.87%
		難	崩れかかる	2	崩れかかっている古い家を直した。	60.00%	58.25%
	入る	易	聞き入る	4	学生たちは先生の話に聞き入った。	58.46%	67.96%
		難	感じ入る	2	人々は感じ入った様子でおばあさんの話を聞いた。	55.38%	49.51%
他動詞	上げる	易	書き上げる	4	30分で作文を書き上げた。	70.77%	91.26%
		難	縫い上げる	2	母は一日で私のスカートを縫い上げた。	64.62%	69.90%
	かける	易	飲みかける	4	お茶を飲みかけた時、電話のベルが鳴った。	64.62%	73.79%
		難	倒れかける	2	倒れかけている木を切った。	38.46%	57.28%
	入れる	易	受け入れる	3	先生は学生たちの希望を受け入れた。	78.46%	93.20%
		難	雇い入れる	2	社長は新しくアルバイトを雇い入れた。	56.92%	46.60%

注：語彙的複合動詞以外の設問中の語彙は日本語能力試験の2級までのものである。

2. 間違いであると判断されるべき項目

V ₂	間違った複合動詞	V ₁ の級	設問	1年間	2年間
付く	閉まり付く	4	風でドアが閉まり付いた。	38.46%	57.28%
	座り付く	4	彼女はいすに座り付いて動かなかった。	52.31%	54.37%
上がる	歩き上がる	4	坂道をゆっくりと歩き上がった。	78.46%	93.20%
	返し上がる	4	借りていた本を図書館に返し上がった。	73.85%	64.08%
かかる	渡しかかる	4	川に木の橋を渡しかかった。	56.92%	46.60%
	困りかかる	4	赤ちゃんが泣くので、若い母親は困りかかった。	40.00%	32.04%
入る	洗い入る	4	汚れたシャツをきれいに洗い入った。	86.15%	89.32%
	作り入る	4	人形作家がていねいに人形を作り入った。	41.54%	46.60%
付く	終わり付く	4	今日の仕事はすべて終わり付いた。	61.54%	76.70%
	分かり付く	4	先生の説明を聞いて、問題の意味が分かり付いた。	83.08%	74.76%
上げる	泳ぎ上げる	4	男の子が25メートルの長さのプールを泳ぎ上げた。	49.23%	58.25%
	使い上げる	4	ノートを最後まで大切に使い上げた。	60.00%	72.82%
開ける	忘れ開ける	4	今朝、ドアの鍵を忘れ開けた。	64.62%	69.90%
	会い開ける	4	友達にもらったプレゼントの箱を会い開けた。	40.00%	53.40%
入れる	答え入れる	4	難しい数学の問題を答え入れた。	73.85%	78.64%
	見せ入れる	4	友達に家族の写真を見せ入れた。	63.08%	66.02%

注：設問中の語彙は日本語能力試験の2級までのものである。語彙的複合動詞はすべて、『逆引き広辞苑』にないものである。また、問題の構成を見破られないようにするために、正文と同じV₂動詞を使った。